

「まふい、近い。」

ヨルファミリア本部——昼下がり。珍しく任務も訓練もない、完全な休日。ヨルは大食堂の一角にあるソファの真ん中でスマホを眺めながら、のんびりくつろいでいた。

「……平和だなあ」

その隣には、当然のようにまふい。……いや、隣という表現は少し正しくない。ぴったり。肩と肩どころか、身体の半分くらいがヨルにくっついている。

「まふい」

「はい、ヨル」

「近くない？」

「いいえ」

即答だった。



「いや近いって」

ヨルが少し横へずれる。まふいも同じだけ横へずれる。さらにヨルがずれる。まふいもずれる。

「……………」

「……………」

ヨルがソファの端まで逃げる。まふいも当然ついてくる。

「なんでついてくるの」

「ヨルが移動されたので」

「そうじゃなくて！」

まふいは何がおかしいのか分からない、という顔をしながらヨルの肩に頭を預けた。首元には、いつもの鍵付きの黒いチョーカー。普段の力を安定させ、解除の判断をヨルへ委ねている信頼の象徴だ。

けれど今のまふいから危険な雰囲気は一切ない。むしろ――



「ヨル」

「ん？」

「頭、撫でてください」

「……今日めっちゃ甘えるじゃん」

そう言いつつ、ヨルはまふいの頭に手を置く。なでなで。

「……………♪」

明らかに機嫌が良くなった。

「分かりやすっ」

ヨルが笑う。すると今度は、まふいがヨルの手を両手で捕まえた。

「もう一度」

「はいはい」

なでなで。

「もう一度」



「まだ？」

「もう一度」

「無限じゃん！」

そのやり取りを、少し離れた場所からレモンが見ていた。

「……また始まった」

トムカスもちらっと見る。

「いつものことだろ」

さらに向こうでは、ゆーカスといんカスがヒソヒソ話している。

「なあ、あれ相方って距離感か？」

「触れるな。消されるぞ」

「誰に？」

二人がまふいを見る。まふいが笑顔のまま二人を見ていた。

「……………」



「「なんでもありません」」

視線がヨルへ戻った瞬間、まふいの表情は一瞬で柔らかくなる。

「ヨル」

「今度はなに？」

「手を」

「手？」

まふいがそっと手を差し出す。ヨルは少し考えてから、その手を握った。ぎゅっ。

「これでいい？」

「……はい」

まふいは満足そうに指を絡める。

「ちょ、普通に繋ぐんじゃないの!？」

「こちらの方が離れません」



「離れる予定ないから！」

そう言いながらも、ヨルは手を離さない。しばらく二人でソファに座ったまま、何でもない時間が流れていく。やがて、まふいが小さな声で呟いた。

「……こういう時間が、一番好きです」

ヨルが横を見る。いつもの忠誠心に満ちた表情とは少し違う。戦う必要もない。誰かを守る必要もない。ただ隣にいただけで安心している顔。ヨルは少しだけ笑って、繋いだ手を握り返した。

「じゃあ今日は、このままでいっか」

「……！」

まふいの顔が一気に明るくなる。そして数秒後。ぎゅうううっ。

「うわっ！？」

今度は完全に抱きつかれた。



「ヨル♡」

「急に抱きつくなって！」

「このままでいいと仰いました」

「そういう意味じゃない！」

「では離れますか？」

「……………」

ヨルは少し黙る。

「……まあ、別にいいけど」

「！」

ぎゅううううっ。

「強くなってる強くなってる！」

部屋の向こうからレモンの呆れた声が飛んでくる。

「はいはい、ごちそうさまー」



「レモンうるさい！」

まふだけは幸せそうにヨルから離れない。戦場では圧倒的な力を振るうヨルファミリア第2席。けれど休日の彼女にとって——世界で一番重要な任務は、

ヨルの隣を確保すること。

そしてその任務だけは、今日も完全成功なのであった。

